

ご挨拶

いつの時代の人も、幸せとともに、困難や寂しさを感じています。金子みすゞもその一人です。世間が賑わっているその一方で、せつない想いをしているものたちがいます。

金子みすゞの作品には、幸せな光景とともに、「かわいそう」「さみしい」といった言葉が同時に散りばめられています。みすゞの「鯨法会」「大漁」いう詩は胸にせまります。

くじらほうえ 鯨法会

鯨法会は春のくれ、

海に飛魚探れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が、

ゆれて水面をわたるとき、

村の漁師が羽織着て、
浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしと泣いています。

海のおもてを、鐘の音は、
海のどこまで、ひびくやら。

(『金子みすゞ童話全集』第6巻、128～129頁、JULA 出版局)

金子みすゞは、自分たちの喜びとは対極にある他者の悲しみを感じ取っています。幸せを喜んでいる人のすぐそばで、独りぼっちで悲しんでいるものたちがいます。多くの命を頂いて、私が生かされています。だから、相手の身になって、自分自身をふりかえることが大事であることを、この

詩が教えてくれます。金子みすゞの詩に感じる深い優しさは、存在の孤独さや寂しさを知ったところから生まれているのでしょう。

「星とたんぽぽ」という詩では、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」(『金子みすゞ童謡全集』第3巻、164頁、JULA 出版局)と、私たちに呼びかけています。愛情や優しさが目には見えなくても、人に生きる力を与えるように、目には見えないものの大切さを教えてくれます。昼に星が見えないから、夜空の星はいつそう煌めいて感じます。タンポポは冬に姿が見えないから、桜の下で咲く小さなタンポポを見つけると元気づけられます。

さびしいからこそ互いにこだましあおう。葉っぱが光に向かって広がるように、明るい方に向かって生きて抜いていこう。そう金子みすゞは、私に呼びかけています。私たち一人ひとりがそれぞれに、金子みすゞの詩を通して、大切なものを見つけられることを願っています。

本展「金子みすゞ いのちへのまなざし」開催にあたり、文部科学省、金子みすゞ著作保存会、金子みすゞ記念館、金子みすゞ顕彰会、JULA 出版局、金子みすゞ長女の上村ふさえ様、山口県長門市、下関市の有縁の皆様、特段のご協力とご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

最後に、矢崎節夫館長が、『童謡詩人金子みすゞの生涯』の本に、サインして下さった言葉をここに感謝を込めて紹介します。そのまなざしは金子みすゞの心と響きあっています。

「流されながら花の目は きっと大空を見えています。」 矢崎節夫

2012年10月10日

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
龍谷大学 人間・科学・宗教オープンリサーチセンター長
鍋島直樹